



## 2024年6月「福島県地球温暖化防止活動推進員の会」（県北地区）活動報告

6月15日13時から14時30分まで、福島市内のアオウゼで7名が参加して県北の会が開催されました。



6月15日の会議の様子

1. 本宮市「第25回こどもまつり」参加報告  
5月25日、本宮市みずいろ公園で10時から15時まで「第25回こどもまつり」が開催され、4名の会員が参加し、「地球温暖化防止かるた」「エコカルタ」「アンケート調査」などを実施しました。風の影響を受けやすい屋外開催でしたが、晴天の下、「地球温暖化防止かるた」を少人数に分けて実施するなど工夫をしながら短時間



5月25日の本宮市第25回こどもまつりの様子



本宮市第25回こどもまつりでの「地球温暖化防止かるた」の実施状況

で多くの方に体験していただきました。特に、参加者のうち子どもたちの反応がよく、一緒に楽しむことができました。来場している子どもたちや親子連れに声をかけると気楽に参加してくれて、ブースは概ね盛況でした。ブースにお越しいただいた方にアンケート調査を行ったところ、70人以上の方に御協力をいただきました。福島県のごみの量やリサイクル率などの質問の正解者は少なく、さらなる広報活動の重要性を再確認しました。

2. 福島県地球温暖化防止活動推進センター貸し出しパネルについて

5月13日に福島県地球温暖化防止活動推進センターに出向き、パネルなどの資材を確認しました。パネルは古いものが多いので更新などの必要性を感じました。

3. 「地球温暖化防止かるた」の活用について

「地球温暖化防止かるた」を7月、福島市大波の「子ども食堂」で開催することになりました。また、今後も会員の住んでいる地域で、かるたの活用を積極的に働きかけることや、実施の際には会員同士で手伝うことも確認しました。

#### 4. 福島市環境フェスタについて

今年の福島市「環境フェスタ」は、10月6日に、市内の中心市街地にある「まちなか広場」で開催することが決まりました。

#### 5. その他

- ・次回県北の会は、9月18日13時から16時までアオウゼで開催します。また、12月9日は14時から17時まで研修会を予定しています。
- ・「“暑さに負けない！ふくしま熱中症対策”トークイベント」が6月19日13時30分～14時30分までコラッセふくしまで開催され、推進員も多数参加しました。
- ・「成果報告会」が6月25日10時30分～16時15分まで福島県環境創造センターコミュニティで実施され、推進員も多数出席しました。

### IPCC 第6次評価報告書ワーキングII 第12章：中南米地域

中南米地域を代表するアマゾンの森林は、世界有数の生物多様性と炭素を貯留する機能を有する地域の一つですが、干ばつなどに非常に脆弱な地域です。アンデス山脈の地域では、気温の上昇により氷河面積が30%～50%減少し、陸域種の分布が低地から高地へ移動し、高地種は分布範囲を縮小し、多様性が失われつつあります。また、地滑りや洪水災害が発生し、生態系や水資源、生計に影響を及ぼしています。さらに、中南米地域の沿岸域を含む海域では、サンゴの白化現象の増加や塩性湿地、マングローブの減少なども顕在化しています。

図1は中南米地域の生物の多様度指数の分布を示したものです。多様度指数は生物群集の数の多さとその群衆の種の個体数の多さを示すもので1に近いほど多様性が高いことを示しています。アンデス山脈より東部にあるアマゾン流域では0.8以上と高く、生物多様性の高い地域が広がっていることを示しています。しかし、アンデス山脈の太平洋岸やアルゼンチンでは0.4以下と低くなっています。多様度指数が0.8以上の地点は年間平均降水量が2000mm以上あるのに対して、0.4以下の地点は300mm以下と

降水量が少なく、この地域では降水量が多様性に大きく関与しています。

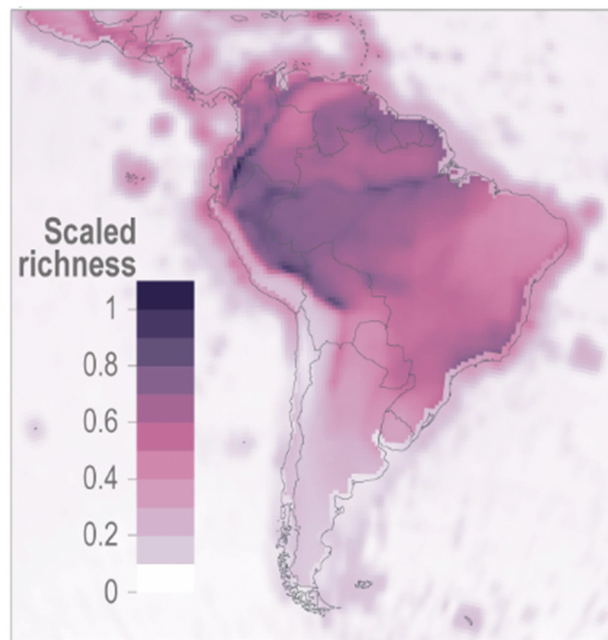


図1 中南米地域の多様度指数の分布 1に近いほど多様性が高い。

図2は南米地域の人間開発指数(HDI)の分布を示したものです。HDIは平均寿命、平均修学

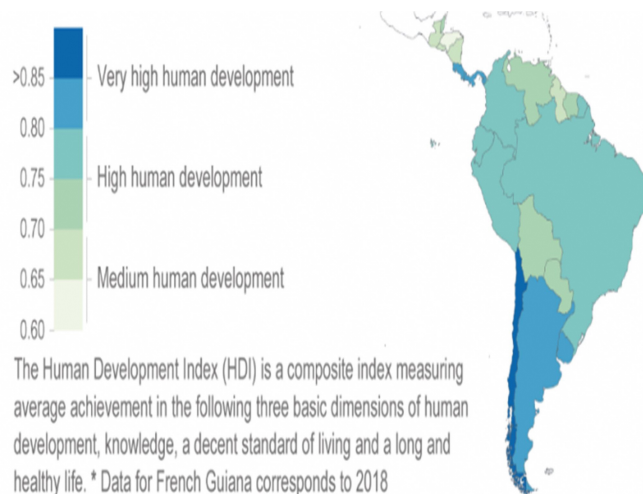


図2 中南米地域の人間開発指数(HDI)の分布 色が濃いほど指数が高い。

年数、一人当たりの国民総所得、識字率などを含めた複合的な指標です。チリでは非常に高いHDIを示していますが、北部のベネズエラ、ガイアナ、スリナム、ギアナと中央部のボリビア、パラグアイなどでは中程度のHDIが示されています。チリはこの地域で平均寿命が長く、一人当たりの国民総所得が最も多くなっています。HDIが低い国では、この2つの項目が低くなっ

ています。

このような地域でどのような気候変動リスクが存在するのかを8区分して示したのが図3で

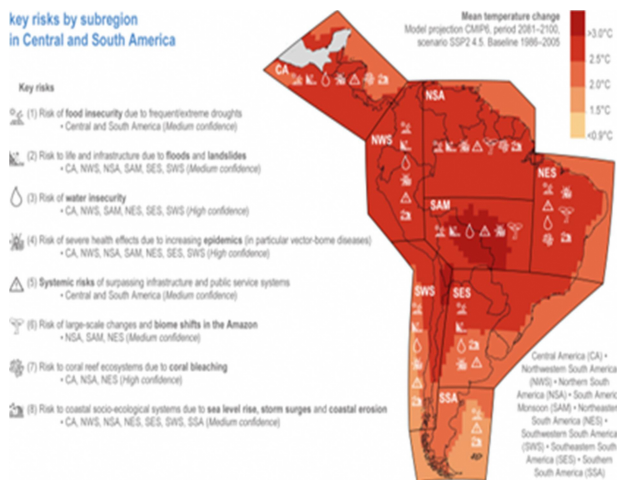


図3 中南米地域の区分ごとの主要リスクと SSP2-4.5 に基づく 21 世紀末の気温上昇量の分布

す。赤色は 1986 年から 2005 年までの平均気温に対する中道的な気候変動対策を進めた場合の SSP2-4.5 シナリオにおける 2081 年から 2100 年までの間の平均気温上昇量を示したものです。主なリスクとして、①度重なる極端な干ばつによる食料生産のリスク②洪水や土砂崩れによる生命やインフラのリスク③水不足のリスク④伝染病（特に媒介動物による感染症）の増加による健康への深刻なリスク⑤インフラや公共サービスなどの社会システムへのリスク⑥アマゾンにおける大規模な変化と生物群系の変化のリスク⑦サンゴの白化によるサンゴ礁生態系へのリスク⑧海面上昇、高潮、海岸侵食による沿岸社会・生態系へのリスクが記号で表されています。南アメリカ南部地域(SSA)では上記のうち3つ（①干ばつによる食料生産のリスク、⑤社会システムへのリスク、⑧沿岸社会・生態系へのリスク）と、他の地域に比べて気候リスクが少なくなっていますが、その他の地域では6~7つの気候リスクが存在しています。

こうした多くのリスクに対する適応策にはどのような課題があるのでしょうか。特に生物多様性を有しているこの地域では「生態系を生かした気候変動適応 (EbA)」が重要な視点になっています。具体的には森林、草原、湿地などの生態系が持つさまざまな機能や生物を最大限活用し、気候変動によるリスクや損失を軽減するアプローチを積極的に取り入れることです。都市内の緑地や河川周辺の湿地、水田など、さま

ざまな地域でもこれを適用することが重要です。また、これらの機能評価の研究も進められており、マングローブなどの生態系が防災だけでなく、生物多様性保全や漁業資源の保全、炭素蓄積などにも役立つことがわかっています。一方で、機能の定量的評価が現在不十分なところもあり、さらなる研究の進展も必要になっています。この地域の適応策では EbA が有望なアプローチであり、地域社会に高度な技術を必要としない点でも実現性が高い適応オプションとなっています。また、食品・繊維の生産では森林を守りながら多様性を生かし、農作物の栽培や畜産を行うアグロフォレストリー(Agroforestry)といった考え方の実践が有用になっています。さらに、洪水による災害リスクの潜在的減少や水資源の確保に関する適応策としては、多目的貯水機能の拡大が有用ですが、これには技術・経済的な課題が含まれているため、実現可能性が低く、適応的アプローチとして潜在的な障壁になる可能性があります。また、健康と福祉に関する適応策では、極端現象や流行状況などに関する早期警戒システムの構築と運用が有用ですが、気候と健康を結びつける政策の欠如、特に気候変動と関連した長期的かつ質の高い健康監視データの不足や空間的・時間的スケールの不一致、気候と人間のシステムダイナミックスの非線形性や時間の遅れ、気候以外の健康影響(公衆衛生、人口動態、生計パターン)に関するデータの不足などがあるため、システムの構築には困難が生じています。さらに、気候変動は貧困や貧困の罫からの脱却にも大きな障害となっています。特に極度の貧困が都市に集中し、非公式居住地などに関する適応オプションについてはほとんど調査や研究が進んでいません。必要とする適応策の種類は極めて局地的なスケールにも関わらず、貧困層の気候変動へのリスクやその対応方法には様々な課題が残されています。貧困層に関する深い理解がなければ、気候変動適応オプションが貧困サイクルの促進や、文化的価値の黙殺につながりかねないといった危険性が存在しています。この地域は、地形、生態系、都市部と農村部、人口動態、経済、文化、気候の点で非常に多様な地域ですが、気候変動に対する脆弱性が高く、適応能力が低いため、すでに気候リスク指数は世界最高レベルにランク付けされています。